

地域の活性化、振興策は様変わりしていると思いませんか。企業誘致もここにこういう用地がある、来てくださいという時代ではなくなった。大学の誘致も、学生や大学そのものが減っていく時代に入った。

活性化にはあと何があるか。人々の想像がつかないような事業、よそがやったからやるのではなく自ら率先して汗を流す取り組みから生まれる。そうでなければ定着しないし、長続きもしない。そんなに簡単ではないことだが、静岡県はあれだけのファルマバレー、がんセンターを作り上げた。

その力、知恵をもってするならばできないことではないと確信している。

### < 略 歴 >

#### ■山根 義久(やまね よしひさ)氏

1943年生まれ。医学博士、獣医学博士。鳥取大農学部獣医学科卒。1970-94年山根動物病院院長。91年財団法人動物臨床医学研究所を設立。94年東京農工大教授(現名誉教授)。2005年から日本獣医師会会長。著書に「イヌ・ネコ家庭動物の医学大百科」「ペットの自然療法辞典」「小動物最新外科学体系(1)」など。



## 『動物の愛護と福祉のセンター ～伊豆創生の新プラン』



<コーディネーター>

中山 勝氏(企業経営研究所常務理事・サンフロント21懇話会TESS研究員)

<パネリスト>

大川 澄人氏(全日空常勤監査役・前日本経済研究所理事長)

出野 勉氏(県文化・観光部長)

山根 義久氏(日本獣医師会会長・公益財団法人動物臨床医学研究所理事長)

◆中山 人間の社会で動物のいない社会は考えられません。動物がいたからこそ豊かな感性が築き上げられてきた。山根先生は基調講演で、日本は人間と動物が共生できる社会の成熟度がまだまだ低いと指摘された。我々が県に推進を提言した「動物の愛護と福祉のセンター」(仮称)は先進国にふさわしい人と動物との共生・共存に基づく快適な暮らしを目的とする共生モデルとなるものであり、情報を逐次発信して全国的な啓もう活動の拠点とすることができる。候補地の一つ伊豆の国市

は温泉健康都市を将来像に掲げ、県が進めるファルマバレープロジェクトの導入によって安心、安全、健康なまちづくりを積極的に推進している。センターと連携することでさらなるまちづくり、新しい地域発展が望め、交流人口の拡大や産業の創造につながるのではないかと考えています。

3・11東日本大震災は観光が主産業の伊豆に間接的な被害をもたらしました。伊豆の国市をはじめ伊豆地域は今どういう状況に置かれているのか。県からお見えの出野部長に伺います。

## 東日本大震災で観光に打撃、 明るい材料は進むインフラ整備

### ◆出野 伊豆地域の主たる産業・観光は平成の初



出野 勉氏

めごろまでは  
絶好調で、黙  
って座ってい  
ても東京から  
お客さんが来  
てくれた。宿  
泊客数でみる  
とピークは  
1991年、県  
内は2700万  
人あり、うち

1900万人が伊豆地域に泊まった。この後バブル  
のはじけ、景気が落ち込むと、2009年には全県  
の2700万人が1700万人に、伊豆地域は1900  
万人から1000万人。伊豆は何と900万人も落ち  
込んだ。言ってみれば一人負けの状態です。

東日本大震災の影響は大きい。直後の宿泊キャン  
セルは全県で約10万件40万人。うち約30万人  
7万件が伊豆地域です。東京電力管内で計画停電  
があり、東京からの「踊り子号」が運行を取りや  
めるなど直接的な影響を受けた。

明るい材料もある。県内の新東名は来年にも供  
用を開始する。ネクスコ（中日本高速道路）が最  
終調整中です。伊豆縦貫道は2013年度中には修  
善寺道路につながるだろう。交通アクセスが緩和  
され、利便性が格段に向上する。さらに「東部コ  
ンベンションセンター」（仮称）の建設が始まる。  
インフラが今後かなり整備されて来るということ  
です。これをいかに利用してお客さんを取り戻す  
かがこれからの伊豆地域の課題です。そのため  
には民間を含め地元の方々がいかに本気になって  
お客さんを集めるか、それができなければ目の肥  
えたお客さん呼び込み、伊豆のにぎわいを取り  
戻すことはできない。

国は一昨年観光庁を作り、観光を21世紀のリ  
ーディング産業として育て上げていく方針だ。イ  
ンフラ整備が進む東部、伊豆地域にとっては追い  
風になる。もう一つは富士山静岡空港の活用。地  
方空港では珍しく海外からのお客さんが多い。最  
初に目指すのは富士山、そして伊豆。空港の観  
光案内所が受ける質問では富士山へ行くには、伊  
豆へ行くには、が圧倒的に多い。富士山静岡空  
港を含め西の方から来るお客さんを伊豆に運び  
込むにはどうすればいいか、フェリーを使ってい  
ただくのが一番おもしろい。こうしたインフラ  
整備を含めた追い風をいかに伊豆の方々が生か  
し、お客さんを集める算段をしていくか。皆で汗  
をかくこと

が重要だと思う。

◆中山 伊豆の観光は大震災の影響で一時的に  
落ち込んだが、一方でインフラの整備が進むなど  
新たな需要喚起につながる明るい材料もある。各  
地の事例にも詳しい大川さんは地域経済の現状と  
課題をどのようにとらえていますか。

## もがき苦しむ地方、 大震災は精神構造を変えるか

◆大川 伊豆に限らず、どこも同じかもしれない。  
地域経済は人口の減少と高齢化の中でもがき苦し  
んでいる。もがき苦しんでも生みの苦しみに  
次の明るい所に来ている人たちもいれば、そのま  
まずるずると行ってしまっているところもある。  
加えて今回の震災と原発事故が地域社会にいろ  
んな影響をもたらしている。日本人のメンタリ  
ティーを変えてしまうかもしれない。

人口減少の問題を確認しておきたい。40年後  
の2050年、日本の人口は1億を切るかもしれない。  
その時の65歳以上の比率は約36%。生産年齢人  
口（15歳～64歳）ではない方が3割以上を占める。  
2000年の時は生産年齢人口が8600万人、75歳  
以上の方は900万人だった。2010年には8100万  
人に対し1422万人、20年後の2030年になると674  
0万人に対し2266万人と推計されている。2000  
年には10人に1人の比率が2030年には3人に1  
人となる。そんな状況になった時どうなるか、ち  
ゃんと考えなくてはならない問題だ。

戦後の地域政策はまず国民、県民の所得を上げ、  
地域格差の是正を目指した。新産業都市とか工業  
整備特別地域など産業の立地促進を図った。その  
後もテクノポリス構想とか産業クラスター構想が  
登場し、商店街の問題も重要だとして中心市街地  
の活性化にも取り組んだ。全体として成功事例も  
あれば失敗事例もある。だがずっといいは少ない。

相対的にみてよかったものは何か。一つは本当  
にちゃんとした工業が出てきてくれたところ、大  
学がちゃんと本格的に移転してきてくれたところ  
で、それなりに成功している。

観光では、長野県の小布施とか九州の黒川、湯  
布院の温泉。そんなに大規模ではないがそれなり  
の成功を収めている。これにも波がある。阪神大  
震災の後、北陸や鳥取とかの温泉街は大幅に客が  
減った。関西の人が行く温泉地だからといわれた。  
ところが5年、7年、10年たっても戻らない。  
そのうちに整理されたり倒産したりした旅館がた  
くさん出てきた。分析してみると、きっかけは震  
災かもしれないが、ある意味での構造変換が起  
きた。日本全体の活力の低下、人口構成の変化が  
あったなどの要素が浮かび、変化の中で淘汰され  
たとみることにもできる。今回の震災の影響も含めて

日本の地域の現状は甘いものではない。この伊豆も同じではないかと思う。

加えて公共団体、国の財政ひっ迫の問題がある。公共団体は今どういうことを考えているのか。人口が減少し社会構造が変わっていく中で、現状のインフラの整備または維持にどれだけのお金がかかるのか、少なくなった人口なり変わってきた都市の中でどういうインフラをどうするかたちで合理的に維持していくのかということを考えている。現実はその方向で各都市が動き、公共施設マネジメントがいわれ、重要な課題となっている。

◆中山 あらためて山根先生に「動物の愛護と福祉のセンター」の候補地に伊豆の国市を選んだ理由、この施設が伊豆にもたらすものについて伺います。

### 静岡がんセンターがきっかけ、 ファルマ戦略にもつながる

◆山根 生き残る人はもっとも強い人でもなければ、もっとも賢い人でもないという格言がある。変化に対応しなければ繁栄は続かない。正直に言って企業誘致とか大学誘致の時代は特殊なものを



山根 義久氏

除いてもう終わったのではないか。その点からすると、この動物を相手にした事業・ふれあいセンター構想は全く新しい展開だ。成功するかしないか、成功したら地元が潤うか潤わないかは誰にも分からない。でもやるだけの価値はあると思います。

3年ほど前からファルマバレーセンターとがんセンターのことは聞いていた。がんの専門家の東京農工大学・伊藤博教授は「ハード、ソフトの両面で素晴らしい施設。もし私が、がんになって入院するならばあそこしかない」と語っていた。昨年たまたま行く機会があり、拝見して感銘を受けた。独創的なアイデア、素晴らしいソフトに感激した。その際に相談を受けたのは、「ファルマバレープロジェクトの第3次戦略がこれから始まる。動物の方で何らかの関与はできないか」ということだった。

動物のがん研究は人間以上に、ある部分では動物、獣医学関係が進んでいる。遺伝子治療とか免疫療法とかが実際に行われ、人間医学の研究レベル以上に研究が早く進む可能性がある。「ふれあ

いセンター」は研究とは直接関係ないが、センターができることによりいろんな付帯事項が育つ。例えば増加する老人のモチベーション維持に役立つ。日本を背負って立つ子供の感性を育てるため老人が仲介役となり、ふれあいセンターで動物と一緒にある時間を過ごすことができる。

欧米も含め獣医学は学校飼育動物に力を入れてきた。日本もようやく文部科学省が学校医指定の手前まで来たが、欧米では既にその時代は終わっている。学校飼育動物はほとんどいない。その代わり今は機能を整えたセンターを作り、そこに行ってふれあいなさいということになった。確かにその方がいろんな動物がいるし、きちんと訓化されているからリスクも少ない。きれいで臭いもしない。ふれあいセンターは素晴らしい施設になり得るし、新たな活性化策に位置づけることができる。

◆中山 動物の世界も高度先進医療の時代。犬は人間よりもがんになりやすい、ドッグイヤーで進行も人間より早いといわれる。ファルマバレープロジェクトと山根先生のセンター構想に相乗効果を期待してもいいでしょうか。

◆山根 私は犬のがん発生率が決して高いとは思っていない。犬の場合は犬種によって異なり、悪性のがんが出やすいタイプがいる。常識的には犬の寿命は短く、がんの進行も早いから5年のタームを1年で見ることができる。医学の発展からみてもきわめて合理的だ。これまでのがん研究はマウスやラットを使い、自然発症ではなく人工的に発がんさせて化学療法の結果を出していた。ところが犬や猫には自然発症がたくさんいる。それをモデルにすれば自然発症ですから動物実験ではなく、がんを自然発症した動物を治す形で研究できる。一石二鳥の効果がある。会場に東京農工大の伊藤教授のもとで動物の先端医療をしている方がいます。現状を説明してくれませんか。

「ファルマバレーと動物の先端医療がどうかかわるか。ドッグイヤーの話が出たが、人のがんは5年生存率、7年生存率をみる。動物の臨床医は1年で生存率をみる。それによって根治、転移がないという判断をする。医療の世界では一つの薬剤、一つの治療法を開発するのに数百億円、10年以上の年月をかける。膨大な資金が必要なビジネスだ。そこを動物と合わせることで、理論的には5分の1、7分の1で開発スピードを速めていける。静岡がんセンターには研究所があるので連携が取れる。センターが保護、収容した動物の9割が病気をもちその半分に手術が必要となるとデータが集めやすい。センターに来たワンちゃんたちは先端医療で治療し、そのデータを静岡がんセンターに持っていくことで人の医療にも役に立つ。そうしたサイクルが生まれる」（会場での説明）

◆中山 ファルマバレープロジェクトの第3次戦略は、医療と産業を担う人づくり、質の高い医療人材の育成と研修システムの充実、健康サービスが充実した高次都市機能が集積したまちづくり、健康をテーマとした地域づくり、人が集まる地域づくりなどを打ち出している。ファルマバレーの応援団代表であり、かつ地元出身の大川さんはセンター構想がファルマバレープロジェクトと密接な関係を築くことができると思いますか。



中山 勝氏

健康をテーマとした地域づくり、人が集まる地域づくりなどを打ち出している。ファルマバレーの応援団代表であり、かつ地元出身の大川さんはセンター構想がファルマバレープロジェクトと密接な関係を築くことができると思いますか。

**ファルマは全国的成功事例、幅が広がり地域も拡大する**

◆大川 その点は可能性が高いとみています。その前にファルマバレープロジェクトの評価ですが、国内での成功事例の一つで大変に成功した事例といっても過言ではない。応援団代表だからではなく客観的にみて、数字的なものを出してもそうなる。

地域の活性化や再活性化を目指す地域プロジェクトには、個々の成功ポイントを調べて具体的に当たってみるとポイントがはっきり浮かぶ。いくつかがそろっていればおおむね成功する。キーパーソンがちゃんと本気でやっているか。地域のビジョンがしっかりあって皆さんを説得できるか。地域の資源にはこういうものがあってちゃんと使えることに気づいているか。地域資源をうまく活用できているか。さらにネットワークをきちんと作っているか—などです。

ファルマバレーの場合、キーパーソンはがんセンターの山口総長ですか。地域ビジョンは県が戦略プロジェクトを作り明確にしている。地域の資源では地元で製薬関連企業が古くからあり、国内でもかなりのシェアを占めている。ネットワークの形成もファルマバレー全体の中で担当者を置いて県を中心にうまく使っている。環境を整えているから、今回のプロジェクトをファルマバレーの中にうまく位置づけることは可能だろう。これまではがんセンター中心のイメージが強すぎたが、今回のようなプロジェクトが加わればもっと幅広い概念になるし、地域的にも長泉町から伊豆の国市まで広がって大きなバレーになってくる。

◆中山 出野さんは文化・観光部の前はファルマバレーの担当でした。今回のセンター構想とファルマバレープロジェクトの関係構築は、この地域

の観光や産業にどのような波及効果をもたらしますか。

**必ずあるコンベンション、人が集まる仕掛けを**

◆出野 ファルマを担当していたのはもう5年ぐらい前。第1次戦略の評価をして第2次戦略に行くぞ、という時代だった。他と違うには何をやるかということではファルマバレー宣言をしました。第一が患者のために、そして地域のために。この2つがキーポイント。第1次戦略のころから地域づくりは入っていたが、なかなかそこまで行かず、研究の方からスタートしていった。おかげさまで第2次戦略が終了する去年までには医薬品とか医療機器の開発だけで46件の特許が出てきた。共同研究は100件近いクラスターになってきた。地域づくりにシフトがかけられるのは第3次戦略の期間だと思います。

その第3次戦略は1から4まであり、いろんな共同研究が始まり製品が出てくると、全国あるいは世界から人が集まってくる。人が集まれば何らかのコンベンションを行う。国際会議とか国内会議をして終わったらすぐ帰ることはありません。

今回のセンターも、研究機能は別ということだが、例えばそこで教育・研修があり、会議とか大会があって人が集まるようになると、何らかの波及効果が出てくる。ネットワークにしてもファルマの場合は、新薬をやるための臨床試験はものすごく時間と金がかかる。臨床にいくまでに治験ネットワークとかをいっぱい作った。この治験ネットワークは全国でもトップクラスの病院数とベッド数を抱えている。犬や猫の動物についても同じでしょう。医薬の進歩、医薬の開発につなげていくという意味では大いに期待できる。また交流人口の活性化のためにも人が集まる仕掛けは必要です。

◆中山 山根先生にお聞きします。センターがオープンしたとき、年間どれくらいの方が訪れますか。基調講演では学会ですと5000人という話が出ましたが。

**愛護団体のネット化重視、子供の豊かな心を育みたい**

◆山根 そこまではまだ考えが及んでいないが、ネットワークづくりは最重要視しています。国内には民間の愛護団体だけでも中小を含め2千数百ある。これらをネットワーク化しレベルアップを図らないと日本の動物愛護の精神が涵養（かんよう）されないし平準化もされない。動物愛護、福祉という大きな目標は一緒なのに足の引っ張り合

いばかりやっている。これを何とかしなくちゃいけないというのがセンター構想の一つのきっかけです。伊豆にこういう施設ができたから、そのネットワークに入るためにはレベルアップをして基準を上げないと仲間に加われないというところまで持っていきたい。そうなれば年間に相当な人数が集まる。全国を結ぶネットワークができ、全国一斉の協力体制が整えば素晴らしい施設になります。

最初から申し上げているが、ハードの面はやれといわれてもできない。土地とか建物とかのハードの部分は何とか皆様方の協力で立ち上げていただければ、年間何億円かかかる運営費は財団の力で何とかしたい。新しい分野ですから、未来永劫（えいごう）にとはいませんが、新しい事業展開はいろいろ起こってくる。いろんな形でのプラス $\alpha$ が期待できる。もう企業誘致、大学誘致の時代ではありません。何らかの違った形での誘致を考えないといけない。その一つがこれじゃないかと思っています。

◆中山 地域とのかかわりでは高齢者のことに触れましたが、それ以外には。

◆山根 やはり子供さんが集まる施設にしたい。昔キンダーガーデンがはやったことがあり、あちこちでできた。それと動物を兼ね合わせた子供が遊んで勉強もできる、記憶にも残るという施設にしたい。物質文明主導型はすぐに忘れるが、精神面が刺激されれば子供の心にずっと残る。そういう施設にしたらどうか。お年寄りから子供まで皆が集まっているいろんなことをやっていけば相乗効果が期待できる。

◆中山 地域の話をもう少し続けます。大川さんにお聞きしたいのはこれからの時代を考えた場合、地域に新たな日本のビジネスモデル的なもの、新しい地域の仕組みとして考えられるものは何でしょうか。またこのセンターは地域にインパクトを与えますか。

### 生かそう富士山、エリア広げて考えよう

◆大川 今回のプロジェクトは可能性が高く、で



大川 澄人氏

きるのではないかと思う。ただ伊豆長岡と限定するのではなく、もう少し幅広いエリアの問題としてとらえられないだろうか。

富士箱根伊

豆国立公園を引き合いに皆さんにお尋ねします。伊豆地域は富士山を意識した地域づくりをどう考えていますか。伊豆の国市には富士山がきれいに見えるところがたくさんある。富士山がきれいに見えるところ、またはきれいに見えるまちづくりと、今回のプロジェクトのようなものを含めてやっていった方がもっと大きな観点から地域づくりをとらえることができるのではないかと。もう一つは今生きている我々じゃなく100年後の子供たち、そこに住んでいる人たちの観点に立ったまちづくりをやっていく。そのためには地域にある一番大事なものをめがけていくことが重要になる。

素晴らしい富士山と伊豆の国市の観光資源なり、伊豆の観光資源を合わせた地域づくりを考えていくと、今とは違った街並みを作っていくことができます。これが皆さんの中に定着してくれば新しい魅力的なものが生まれる。そんなまちづくりを考えられると、もうちょっと大きく作れるのではないのでしょうか。

◆中山 センター構想が実現していろいろな人が出てきたり、新たな観光が生まれたりと変化していく。期待は大きいわけですが、地域に生かすために必要な仕組みにつきまして、出野さんにお聞きします。

### 交流人口拡大には仕込みが肝心、センター事業にプラス $\alpha$ で

◆出野 難しい質問ですね。地域の活性化には地域独自のものがいい。文化・観光部は昨年できましたが、その中で私たちが一生懸命取り組んでいるのは地域の文化資源を再発掘し、地域の人たちがもう一度それを再確認することです。文化と観光が一緒になって初めてできる事業です。地域にはいろんな資産、資源が埋もれている。これを何とか生かしたい。伊豆の国でしたら市民の方々が自分のところで持っている資源をもう一度再確認して、その良さを再確認して発信していくことがこれからの観光、交流人口の拡大に必要です。

伊豆の国市の韮山反射炉が九州・山口世界遺産の登録遺産の候補になった。富士山の世界遺産登録は今月中には推薦書原案を出して2013年登録を目指している。次のステップとして韮山の反射炉も世界遺産になるかもしれない。これを地域がどう受け止めていくか、考えどころだと思う。

山根先生の話にもありましたが、単にセンターが行う事業でそこに人が集まるだけではなかなか成功しない。どうやって活用していくか、そこに集まった人たちをどうやって伊豆の国市、あるいは伊豆地域の交流人口拡大につなげていくか。その仕組み、仕掛けはセンターが描く4つの事業にプラス $\alpha$ のような形で仕込みたい。そうでなければ

ばセンターに来てそのまま帰ってしまう。地域の活性化にはつながりません。

◆**中山** この構想を成功させるため、どんな事業にもつきもののリスクについて触れておきたい。その点をお一人おひとりにお聞きしてパネル討論の閉めとします。

### ふるさと納税の対象に リピーターを増やそう 命の尊厳は永遠のテーマ

◆**大川** PFI（民間資金を活用した社会資本整備）の導入が各地でみられるが、課題はやはり収入と支出のバランス。公共団体が作り委託するのが通常だが、財源調達は難しい問題で必ず議論になる。

財源に関して提案したいのは、ふるさと納税をこのようなプロジェクトに使えないかということです。ふるさと納税は2008年度から始まったが、現実にはそれほど活発に資金が集まらない。しかし今回の震災で、東北地方にはふるさと納税のような形でかなりのお金が各公共団体に寄せられた。日本人の意識が若干変化しているから、ドネーション（寄付）をふるさと納税の形ですることもありうるのではないかと思う。

もう一つは静岡県ではほとんどやっていないが、原付自転車のプレートは各地方公共団体が勝手に作ることが可能で、全国1750の市町村のうち51市町村にご当地版がある。ゲゲゲの鬼太郎のマーク入りというご当地プレートも。伊豆の国でも今回のプロジェクトの表示だよというものを作り情報発信する。市民の意識向上、盛り上げにつながる。

◆**出野** 財源的には国、県、市町とも非常に厳しい状況にある。大川さんのふるさと納税とか原付自転車のナンバープレートはいいアイデアだ。一番大事なのはやはり地元の方々が本気になって一緒に取り組むこと。どんなプロジェクトもそうだが、「良いだ悪いだ、ああだこうだ」よりも地域が一体となって進めていくことが成功への重要なポイントになる。センターの場合、事業に応じて来る人たちをどうやってリピーターにするかでしょう。日帰りだったら一泊してもらおう、そこに必要なのはやはり地域の魅力。地域の人たちが皆で

考えて一泊、連泊とだんだん増やしていけばいい。

例えば東京から来るお客さんはだいたい1万1千円ぐらい落としていく。3・11直後の県内キャンセルは40万人、単純に当てはめると44億円損をした。消えた44億円を取り戻すためには、1万1千円ずつまた落としてもらわなくてはならない。地域が元気になるためにはいろんな仕掛けが必要になる。

◆**山根** 私は経済学者ではないので経済波及効果は分からない。ただ命あるものを取り扱うことは難しい半面、非常に興味のあるいつまでも変化する事柄だ。動物の命は日々、年々変わるからいろんな対応をしなければならない。ですから飽きない。レポートの視点からもモノや物質とは異なるので、面白い興味ある結果が出るのではないか。

実現に向けて様々な課題をクリアするためにはまず地元の方々、議員さん、それから県の方々、議員さん、そして県民、市民、これらが一丸となって協力体制を作り上げないことには不可能だ。

◆**中山** この地域が文化度的にも成熟社会になることによって新しいまちづくりのきっかけができ、新しい地域がこの伊豆に生まれることを期待したい。地域づくりの新しい手段として今回のセンターがあり、これを契機に地域資源を掘り起こすことによって光り輝く地域になっていこうではありませんか。

#### ◇パネリスト

##### ■大川 澄人(おおかわ すみひと)氏

1969年日本開発銀行(現日本政策投資銀行)入行。2004年副総裁。07年財団法人日本経済研究所理事長。11年6月から全日空常勤監査役。ファルマバレー応援団代表。東京大卒、伊東市生まれ。

##### ■出野 勉(いでの つとむ)氏

1975年静岡県庁入庁。企画部知事公室長、厚生部理事(富士山麓先端健康産業集積構想担当)などを経て2010年から文化・観光部長。新潟大卒。

#### ◇コーディネーター

##### ■中山 勝(なかやま まさる)氏

スルガ銀行入行後、財団法人企業経営研究所出向。主席研究員、部長を経て2008年から常務理事。県、沼津市、三島市などの委員、日大国際関係学部非常勤講師などを務める。サンフロント21懇話会のシンクタンクTESS研究員。

### サンフロント21懇話会の会員情報

#### ■新たに入会された方

◇株式会社 ホテルサンバレー  
・代表取締役

新田恭一郎

#### ■会員の変更

◇富士通(株) 静岡東支店  
・支店長

平野 幸雄 → 同 吉谷 幸博